海外だより

タイ、チャンタブリを訪ねて

社会保障研究所研究第一部長　保坂哲哉

タイには，日本や欧米あたりの国々と違って，名所や保養地というものは少い。一つには，歴史的伝統，あるいは歴史的伝統の保存といったものについての考え方にもよるのであろうが，巡礼という宗教的慣行の欠如，レジャー習慣の貧困など様々な要因によってもたらされたものであろう。そういう数少い保養地のなかでも，首都バンコックから東南約100Kmのシャム湾岸にあるバンセン，パタヤという二つの海浜レゾートはとくに人気が高く，外国人でしばらくタイに滞在する人は，かならずといってよいほどよく訪れる。とくにバンセンから少し東南に離れたパタヤは，海の水もきれいで近くに小さな島々もあり，最近はホテルも数多く建てられて，人出も少くない。この辺りの海は，河川とは違って透明度が高い。そしてなんといっても熱帯地方であるため海の水は暖い。エビやカニ，そしてさまざまな魚は豊富で新鮮である。ただ味は脂肪分がほとんどなくあっさりしたものばかりである。

今回筆者が訪れたのは，しかし，この海浜保養地ではない。パタヤを通過して東南にさらに約200Km，バンコックからは330Kmの地点にあるチャンタブリである。国際協力事業団の日タイ2国間医療協力プロジェクトの打合せのため，公衆衛生院の橋本正己先生を団長とするチームの一員として参加する機会を与えられ，本年3月11日から24日まで丁度2週間タイを訪れたのである。このプロジェクトのfieldが，全国で71ある県のなかの一つ，チャンタブリ県であった。

筆者はかって1960年代の後半バンコックを幾度も訪れたし，1966年から1969年にかけて2度にわたり，2年3か月バンコックで勤務していたこともあった。しかし，このカンボジヤ国境に接するチャンタブリ県を訪れるのははじめての経験である。ここは辺境の地ではあるがまた有名なところでもある。というのはこの地方は宝石の産地であり，首都チャンタブリ市は宝石の取引きが盛んである。つい先頃の4月下旬NHKテレビがこの地方で取材したフィルムを放映していたとき，その模様が写されていた。いまはカンボジヤ難民やポル・ポト軍が越境してくるところとして注目を集めている地方である。もっともチャンタブリの東にはもう一つトラートという県があるため，東北端の一点を除いてカンボジヤとは直接は境を接していない。この辺りの海岸線は，かなり複雑に入り組んでいて，海辺の村人たちは漁業に従事している。そうした海辺にはベトナムの難民が漁船でたどりついて住みついている。このように，チャンタブリ県は，いまやタイにとっては政治的，戦略的にも重要な舞台となった。

バンコックからチャンタブリまでの公共的な交通手段はバスだけである。エアコン付きの直通デラックスバスが，バンコックの中心部大丸百貨店の向い側から出ている。今回の旅は一種の団体旅行で一切の面倒をみてもらったので，バス代がいくらかかったのか，聞かされたけれども記憶にはとどめようともしなかった。道路は途中まで片側2車線，広い中央分離帯があって立派である。まだ100％完成はしていないが，バンコック市内のすごい渋滞の中を走るのとは比べものにはならない快適なドライブであった。ただ残念であったのは，道路が立派になったおかげで，いかにも南国的な濃紺の水をたたえた小川と，椰子やバナナの緑をながめながら走るのどかなドライブの味は失われてしまったことである。このスクムヴィト道路と呼ばれる幹線道路は，バンコック市の中心部に発し，チャンタブリからさらにトラートまでカンボジヤ国境へと伸びているが，途中バイパスによって結ばれるウタパオ空軍基地，サタヒップ海軍基地が立地しているため軍事的に重要であるだけでなく，バンコック郊外かなり遠くまで多数の工場が立地していて産業的にも重要な道路である。

タイの道路網は，この道路だけに限らずよく整備されている。チャンタブリのような辺地でも至るところ舗装道路が張りめぐらされ，マツダの乗用車並みの大きさの小型トラックの荷台に，２列の向い合わせのベンチを取り付けた合乗りタクシーが走っている。チャンタブリ県には，首都チャンタブリには国立病院があって，医師30人足らずが外来，入院診療に当っているほか，おもな町４か所に医師１人の病院（兼保健所，ベット約10）があるだけである。重病人が出ると，住民達はタクシーを使って国立病院までかけつけるという話であった。病院はいつも一杯で，入院患者の平均在院日数は４日，一通りの手当てをすればすぐ退院させてしまう，そうしなければニードに追いつけないというのが，院長の話であった。

タイのもう一つの，そして歴史的にはより重要な交通路は河川である。とくにタイの中央部を北から南へと流れるチャオ・ピア河系は，たんに交通という点だけでなく意義深い。河口，シャム湾岸に巨大な沖積平野を形成し，農業用地と農業用水を供給した。この川の流域は，今回訪れた渇水期でも田畑は緑につつまれている。タイは，19世紀の終り頃，丁度日本と同時ぐらいに世界経済に門戸を開き，米の輸出を通じて農業の飛躍的拡大を遂げた。米の生産と輸送の両面で重要な役割を果したのがこの川である。観光で有名な水上マーケットは，タイの人々の生活や産業と川の緊密な関係を象徴的に表わしている。ところが，こういう豊かな水資源に恵まれない地域は，いまなおタイには多い。東北タイのラオスにつながる地方は，そのもっとも代表的なもので，貧困地帯である。東北タイの南部はカンボジヤにも境を接している。昔から東北タイでのゲリラ活動なるものが，常に新聞紙上で報道されている。チャンタブリ県は，それほどではないようである。しかし，われわれが訪れた渇水期には，ほんとに水がなかった。チャンタブリ地方は果物の産地としても有名である。われわれが訪れた頃，果物のなかでは高価で，美味ではあるが特有の臭いのために食べるのを躊躇する人が少くないドリアンがまさに熟れようとするところであった。車で道路を走っていて，両側に黒々とした緑の森をみると，そこにはドリアンの実が無数にぶら下っている。道の両側が開けると一面田畑が広がっているが，そこには白く乾いた土があるだけで緑はない。丁度この渇水期の時期には，果樹園の方に水がとられてしまって田畑には廻らないそうである。

チャンタブリ県のもっとも重要な川はチャンタブリ川である。チャンタブリの町の人々の約半数約３万人に対して上水道が供給されている。水道事務所の人に案内されてその取水口に行ってみたが，そこには小川ほどの淀んだ水しかなかった。渇水期には毎日長時間の断水が続き，ときには全く給水がとまってしまうそうである。上水道がない農村の人々と同様，結局人々は雨水と浅井戸に頼らざるをえない。

雨水はもちろん雨期に貯めておかなければならない。昔から貯水のためには大きな水がめが用いられた。貧しい農家はいまでも水がめに貯水して使っている。日本から輸出されるトタン屋根から水差しのようなものを出して，雨が降れば自然にかめに水が貯まるようにするのである。もう少し裕福な家ではセメントの輪を積み重ねて作った水槽を使う。丁度井戸を地上に建てたような形になる。その下部の方に水道の蛇口をつければ自家水道となる。井戸よりは使い易そうである。さらに高級なものになると金属製の四角いタンクがある。県衛生部長の自宅にはそれが幾つも並べてあった。水がめやセメントタンクとは違って密閉されているのが金属タンクの特徴である。貯水槽には大低ボーフラや藻が浮いているそうだから，金属タンクはそれらを防げるのであろう。

農村部の人々には水を煮沸して飲用にすることを嫌う風習があるそうで，それが消化器伝染病の流行のもっとも重要な原因になっていると考えられている。消化器伝染病の発生状況の把握，その病原物質の解明，感染原因の究明が，このプロジェクトの重要な課題の一つで，そのための衛生検査機能の向上と住民参加が，三つの農村 field を使って進められているのである。

人口25万のこの県は，首都チャンタブリでも人口５万で，都市的な要素は少い。広大な田野や森林が連なるばかりで人々の姿はそれほど多くない。空気は透きとおるほどで，太陽は輝き，いかにも平和でのどかな農村地帯という印象

を受ける。ところが，われわれがバンコックからチャンタブリの町に到着した日，ある兇悪な事件の発生を知らされた。ある漁村の網元の金持が誘拐され，追跡されたため殺害されてしまったというのである。犯人達は人質3人を連れて逃走してしまった。われわれがタイにいる間には結局捕まらなかった。

このホワドという人が住んでいた町は，チャンタブリから東南にある，シャム湾岸の漁村である。最近この町に医師1人職員10名から成る地方病院（1級保健所）が完成した。このホワドさんは病院建設に当り寄付をしている。それだけではない。チャンタブリ郊外にちょっとした滝があって，この地方では数少い観光地の一つになっているが，そこからこの町まで水を引くという雄大な給水事業を私費でやったそうである。

この町のはずれにベトナム難民キャンプがあり，200人余りが収容とも，隔離ともいえる状態で住んでいた。天井の代りに黒いビニール・シートがかけてある。丁度県の衛生部から巡回診療車が来ていて，予防接種を行いその記録作りをやっていた。いまは使われていない寺院がその場所に使われていたが，タイの寺院には必ずあるように，そこは火葬場なのであった。

編　集　後　記

また，夏が来た。この季節に，モンゴル奥地の草原を放浪していたのを思い出す。中国北西の辺境に夢を追い，2度と帰らない気ままな1人旅で，不安や迷いもなかったし，祖国と肉親を捨てた悔いもなかった。毎日，陽は草原から昇り，草原に沈んだ。草原の丘を越えると，周囲の白い湖が遠くに見えた。いわゆる塩湖であった。短かい草の生えた丘の中腹で，一群の羊を追う小さな少年を見かけた。かれは先に長い革ひもをつけた細長い鞭で，羊を追っていた。30数年以前，20歳にはまだ少し間のあるときであった。現在，性分に合わない東京のこせこせした雑踏の中で，大海原のように果もなく続く草原を想う。ビルの中でペンを握っているよりも，大草原で馬を走らせているのが性に合うのである。　（平石）

海外社会保障情報　No. 46

昭和54年6月30日発行

編集兼発行人　社会保障研究所

☎100 東京都千代田区霞が関3－3－4
電話03(580)2511

製作所　和光企画出版株式会社03(564)0338